

歴史の

咸臨丸

— スープの湯けむり —

(一八六〇年)

1

荒れ狂う風雨が帆をゆるがし、大波が甲板を襲った。あばれ出した太平洋では、咸臨丸はおもちゃのように弄ばされた。その艦上で、嵐に負けぬどなり声がした。

「早く帆をたたむんだ。早くせんと、転覆するぞおっ！」

「なんじゃとお、きさまなんぞに命令されてたまるかあ。

たかが漁師のくせに、士官づらしやがって」

おいらはおどろいた。豪雨の甲板をのぞくと、水夫らが肩を怒らし、サムライ中浜と言いつ争っていたのだ。

「争ってる場合じゃない。艦が沈んでえいのかっ！」

「なにっ、暴風のなか帆柱にのぼらせて、わしら殺す気か。きさまを帆桁はげたに吊るしちやる」

「こんなやつ、海に叩きこんでサメの餌にしちまえっ！」

四、五人の水夫が、詰めよろうとしてよろめいた。

ことばはわからないが、これはたしかに反抗だ。

これでも海軍か？ 規律のなきにおいらはあきれた。

命令した中浜万次郎は、大きくかしいだマストにするする昇るや、ひとりで帆をたたみはじめた。

「ああーっ、なんと、なんと、あいつは……」

見上げた水夫たちは目を丸くした。暴風を怖れぬ万次郎の動作に、奇跡を見たかのような驚きぶりだった。

西洋に向かっている日本人による航海は初めてらしい。

日本海軍の軍艦「咸臨丸」は、二月十日浦賀を出港、サンフランシスコをめざして大洋に乗り出したが、その翌日、冬の大嵐に突っこんでしまったのだ。

おいら、じつはアメリカ海軍の水兵だ。ブルック大尉が、日本の軍艦に乗る水兵十人を決めるとき、まっ先に手をあげたスミスだ。日本人を知りたかったからだ。

中浜万次郎は通訳だから、最初に話せた人なので知っている。アメリカ船で一級航海士をつとめた経験もあると。

ところで、帆を万次郎ひとりにやらせられない。

「おい、もの好きのスミス。おれたちもやるか」

ジョージの提案に、「そうとも」と応じた。